

| | |
|--------|------------------------------|
| 学校教育目標 | 夢にむかって ともに学びあう学校 |
| 目指す学校像 | 学校・家庭・地域が信頼の絆で結ばれた、ぬくもりのある学校 |

| | |
|------|--|
| 重点目標 | 1 誰ひとり取り残さない主体的な学びの伴走支援体制を構築する。 2 ユネスコ・スクールを基盤としたSDGs教育により、主体的、協働的に探究する児童を育成する。 3 学校運営協議会を核とした地域学校支援体制を ICT の効果的な活用により実現する。 4 安全で整備された教育環境を維持・改善する。適正な予算執行と会計管理を実現する。 5 ICT 活用による授業改善と効率的な教材研究を実現し、時間外在校時間を縮減する。 |
|------|--|

※重点目標は5つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

| | | |
|-----|---|--------------|
| 達成度 | A | ほぼ達成 (8割以上) |
| | B | 概ね達成 (6割以上) |
| | C | 変化の兆し (4割以上) |
| | D | 不十分 (4割未満) |

| 年度 | | 学校自己評価 | | | | 年度評価 | | 学校運営協議会による評価 | |
|----|---|-------------------------------------|--|--|--|------|---|---|--|
| 番号 | 現状と課題 | 評価項目 | 具体的方策 | 方策の評価指標 | 評価項目の達成状況 | 達成度 | 次年度への課題と改善策 | 実施日 | 学校運営協議会からの意見・要望・評価等 |
| 1 | (現状) ○「学びの指標」の個別最適な学び「個の習熟に応じた支援」は、3.42で肯定的評価は85.5%である。 ○テストの平均点は、国語は、各学年8割から9割である。算数は、低学年8割半から9割に対して中学年で7割から8割程度と低下している。基礎・基本の内容の習得が不十分な児童が各学級に一定数見られる。学習の理解がやや優れている集団と理解が不足している集団に分かれている。 ○「自ら問いをもち、自分の考えを基に、主体的・協働的に探究する新開つ子の育成」をテーマに策定し、SDGs17の目標と関連付けて取り組む研究計画を立て、実践している。 ○市教委、大学教授の指導のもと教員研修を実施し、カリキュラム・マネジメントを策定した。 (課題) ○国語の思考力、判断力、表現力等に課題が見られる。算数は一般的に習得すべき基本的な内容が疎かである。学習習慣が定着できていない児童も多い。「数と計算」「図形」「測定」「データの活用」等の知識・理解、思考力・判断力・表現力の改善が必要がある。 ○カリキュラムオーバーロード対策は、年間授業時数上策定したが、円滑な実践が課題である。 | 学びの質の向上につながるカリキュラム・マネジメントについて | ①教科横断的な視点に立った探究的な学びを推進するためのカリマネに沿った授業を行う。 ②主体的、協働的な学びを追究し、児童が互いを尊重し、認め合う学びと対話を通して考えをつなぐ授業研究を進める。(通年) ③SDGs 教育研究指定校として、市教委及び大学教授を指導者に年間2回の研究授業を実施する。(1・2学期) ④ユネスコスクールとしての ESD・SDGs 教育の評価としてルーブリック(学習評価)とリッカーを主軸とした客観的な成果を得て結果を分析する。(2学期～3学期) | ①ユネスコスクールカリマネマップに基づく授業実践を実施し、児童が自主的に探究を行うことができたか。 ②校内研修研究授業でアクティブ・ラーニング型授業を実施したか。 ③指導者を招聘し、研究授業を2回実施し、研究協議を実施したか。 ④ユネスコスクールとして、教科横断的な授業を実施し、保護者学校評価「ユネスコ・コミュニティスクール」肯定的評価平均 (R6:67%→R7:75%) 児童学校評価「ユネスコ」A評価 (R6:72%→R7:75%) が達成したか。 | ①各学年ともユネスコスクールの取組を年間計画に基づき、実践した。児童が個別の振り返りをエクセルデータに入力し、担任が一人ひとりの探究の進捗状況を確認しながら自主的な学習活動を支援した。 ②2年生と5年生で校内研修研究授業を実施し、主体的・対話的で深い学びを取り入れた教科横断的な授業を実施した。 ③市教委指導主事ならびに大学教授を研修日や研究授業日に来校を要請し、研究協議の際に指導を受けた。児童の現状の分析と指導方法の検討を行い、次年度の研究方向性を明確にすることができた。 ④ユネスコスクール学校評価の肯定的評価の割合は、保護者68% (-7%) 児童 A 評価 72% (-3%) であり、前年度から横ばいで、当初の目標に若干到達できなかった。 | A | ①ユネスコスクールカリマネマップを各学年ごとに内容を再確認し、より効果的なカリキュラムを構築する。 ②校内研修研究授業の主体的・対話的で深い学びの成果を基に、教科横断的な取組を行い、総合的な学習の時間の単元との関連を生かした取り組みを行う。 ③SDGs 教育研究指定校3年目として、児童の成果を目に見える形で分析していく。そのために、大学教授を指導者に迎え、指導・助言を得るとともに、アンケート調査を実施し、児童の実態の経年変化をとらえ授業に生かす。 ④ユネスコスクールとしての活動の更なる周知を行うために、保護者や地域に積極的な広報を行うことで周知していく。 | 令和8年2月17日 | ・宿題の量については、現在各校減らす傾向にあるが、本校においては、基礎学力を向上させる必要があることから、各学級でしっかりと家庭学習ができるように出していくことが求められる。ただし、児童の時間的なゆとりも考慮しなければならない。 ・カリキュラム・オーバーロード対策で、今年度授業時間数を減らしたことについて学力に影響がないのか心配である。次年度、必要な時間数を確保できることと、教える内容が多い中大変であるがしっかりと定着を図ってほしい。 |
| | | 学力の向上、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善について | ①スクールダッシュボードの授業アンケートを活用した学びの支援を行う。(4月) ②保護者と面談で付けたい力を周知し、学習習慣を確立する。(5月から) ③全国学調の結果の分析と学力向上カウンセリングを行い、課題部分の指導方法の改善を行う。(8月から) ④国語・算数の朝のモジュール授業を活用して、学習の基礎・基本の習得に特化した授業支援を行う。(通年) | ①スクールダッシュボードの授業アンケートを実施し、学習フォローアップで児童の自主学習が高められたか。 ②保護者学校評価「学習内容をしっかりと身に付けている」肯定的評価 (R6:80%→R7:85%) 児童学校評価「自主学習」A評価 (R6:47%→R7:50%) が達成したか。 ③学力向上カウンセリングで改善したか。 ④年間を通じて国語モジュール授業を行い、基礎・基本の力を高められたか。 | ①授業アンケートを全学級で実施し、児童の学習進度を把握し、個別最適な学びにつなげた。自主学習については、変化が見られなかった。 ②保護者学校評価「学習」の肯定的評価は、81% (-4%) 児童学校評価「自主学習」のA評価は、44% (-6%) であり、目標の達成には至らなかった。 ③学力向上カウンセリングの指導助言を受け、学びの多層指導モデルを確立した。児童の実態として、最下層の児童のフォローにより、学びに向かう力は見られるようになった。 ④モジュール授業は実施したが、基礎・基本の力には十分な変化はみられていない。ただし、重点的に取り組むことはできた。 | A | ①学びの多層指導モデルの評価システムシートを用いて、児童の学習進度を把握し、個別最適な学びを行うとともに、家庭学習や学習習慣の重要性について啓発を図る。 ②保護者面談で児童の学習評価について詳しく説明を行うとともに、家庭学習や学習習慣の重要性について啓発を図る。 ③基礎学力に特化した指導方法の研究を重点的に行い、最下層の児童の学習の定着を図る。 ④余剰時数を活用した基礎学力タイムを設定し、学びの時間を確保する。 | | |
| 2 | (現状) ○長期欠席となる児童があり、家庭と連携しながら個別的な対応を行っている。 ○些細なことから生じる対人トラブルを自らの力で解決することが苦手な子が見られる。 ○心と生活のアンケートで、元気が低い子、いじめ被害を訴える子、解決スキルの低い子、自尊感情の低い子が見られる。 (課題) ○不登校児童の欠席の長期化に対して、家庭との連携強化や専門機関につなげる必要のある児童も見られる。 ○いじめに係る児童の指導を行っても、精神的な問題でなかなか解消しないケースがある。 ○感情のコントロールが苦手で衝動性が高い児童の問題行動への支援策が必要である。 | 子どもの安心、安全に関する取組について | ①いじめ撲滅や、人権問題における児童主体の取組を実施する。 ②児童会を中心としたあいさつ運動、ペア学級によるなかよし遊びを行う。また、係や当番等学級内の組織を基盤とする活動を活発に行えるようにする。学級会を通して、合意形成を図ることにより、自主的実践的な態度を育成する。 | ①児童会のいじめ撲滅キャンペーンを実施したか。 ②保護者学校評価「思いやり」A評価 (R6:54%→R7:60%) 児童学校評価「思いやり」A評価 (R6:70%→R7:75%) を達成したか。 | ①児童会によるいじめ撲滅キャンペーンを実施した。また、地域の四校で、中学校と連携したスローガンの策定を行った。 ②保護者学校評価「思いやり」A評価 58% (-2%) 児童学校評価「思いやり」A評価 70% (-5%) であり、目標には到達しなかったが、ほぼ横ばいである。児童会によるあいさつ運動を年間を通じて行ったり、校長講話であいさつの重要性を児童に説話したり継続的に取り組むことは行い、やが改善の傾向にはある。学級会での合意形成は各学級で取り組んでいるが、学級によっては、十分に自主的実践的な態度が育っていない。幼い自己中心的な思考の児童が見られる。 | A | ①あいさつ運動やいじめ撲滅キャンペーンは、引き続き児童会が中心となり取り組む。 ②防災に視点を当てた安全教育を導入する。青少年赤十字の活動と連携し、防災における命の守り方や応急手当の仕方など、身を守るための資質・能力を育成する。 ③児童の人間関係を豊かにするために、異年齢集団活動の充実を図る。 | ・あいさつはできるようになってきていると感じている。あいさつは、声を出す子や会釈の子など様々である。朝よりも帰りの方があいさつできている。 ・学校に行くのが楽しいと言って登校している姿が見られる。 ・外国人児童の保護者の安全に対する認識に文化の違いがあり心配している。日本語指導や翻訳機能を活用する等コミュニケーションの取り方に工夫が必要である。 ・下校後、学校に忘れ物を取りに行く際の安全対策が必要である。 | |
| | | 生徒指導、教育相談に関する取組について | ①Sola 一むの個別支援スペースを整備するとともに、教員等の常駐支援体制を整備する。(4月から) | ①保護者学校評価「教育相談」肯定的評価 (R6:92%→R7:95%) 児童学校評価「教育相談」肯定的評価 (R6:96%→R7:97%) を達成したか。 Sola 一むの個別支援スペースを整備するとともに、教員等の常駐支援体制を整備したか。 | ①保護者学校評価「教育相談」肯定的評価 93% (-2%) 児童学校評価「教育相談」肯定的評価 94% (-2%) であり、横ばいである。Sola 一むの個別支援スペースを整備するとともに、教員等の常駐支援体制を整備した。さいたま市教育委員会のSola 一むレポートに取り上げられ、参考事例として市内全校に周知された。 | A | ①不登校児童対策のためのSola 一むの個別支援スペースを整備するとともに、個別学習課題や教育相談に活用できる教材を整備する。 | | |
| 3 | (現状) ○防犯ボランティアの方が、毎日、児童の登下校の安全の見守り活動やあいさつ運動に積極的に参加され、協力体制が整っている。 ○学習ボランティアやPTA 役員等の保護者に教育活動や環境整備等支援いただいている。 ○学校運営協議会で熟議を通してPTAや地域のボランティアの方との連携・協働した活動を実施している。 (課題) ○PTA 役員以外の保護者にもコミュニティ・スクールとして連携・協働の機会を創出していく必要がある。 | 学校運営協議会やSSN、関係機関との連携について | ①SSN 会議で学校支援体制の検討を重ねることで深化させ、PTA 及び高齢化に伴う防犯ボランティアの持続可能な方法による安全登下校サポート体制を組織する。 ②青少年赤十字活動を協働で実施できたか。 ③スクリーンアプリを周知し、登録者を増やし、学校情報を積極的に提供する。 | ①学校運営協議会学校評価「コミュニティ児童像共有」肯定的評価平均 (R6:90%→R7:95%) 保護者学校評価「学校情報公開」A評価 (R6:65%→R7:70%) ②青少年赤十字活動を協働で実施できたか。 ③スクリーンアプリを周知し、登録者を増やすことで学校情報を積極的に提供できたか。 | ①学校運営協議会学校評価「コミュニティ児童像共有」肯定的評価平均 100% (+5%) 保護者学校評価「学校情報公開」A評価 68% (-2%) ②青少年赤十字に加盟し、秋・霜公園のクローン活動等の勤務奉仕的な取組を行うことができた。 ③スクリーンアプリを防犯ボランティアの方にも周知し、登録者を増やすことで学校情報を積極的に提供できた。併せてペーパーレスにもつながることができた。 | A | ①防犯ボランティアの高齢化や人員不足の課題に対し、PTA や SSN との協働により、持続可能な方法による安全登下校サポート体制を組織する。 ②青少年赤十字のリーダー養成研修会に教職員を参加させ、活動から得られた知見を児童に伝達する。 ③スクリーンアプリを引き続き周知し、登録者数を増やすことで学校からの迅速な情報の発信に努める。 | ・地域ボランティアに田島地区がない。どの地区もボランティアが不足している。自治会に声をかけて若い人を募るなどの取組が必要である。 ・スクリーンアプリは、保護者にとって助かる。週案をスクリーンに出す学年と出さない学年がある。親としては、スクリーンもらったほうが便利であるが、子どもには自分で連絡帳に予定を書いて自己管理する力をつけてほしいという思いもある。 ・ユネスコスクールの活動に保護者を巻き込みたいとよい。 | |
| | | 家庭と地域と協働して行う学校行事やイベントについて | ①ユネスコスクールとしての特色を生かした、地域の学習支援ボランティアや保護者との連携・協働体制による教育活動を展開する。 ②開校50周年記念準備委員会を立ち上げる。 | ①ユネスコスクールとして地域ボランティアや保護者をゲストティーチャーとする授業を実施できたか。 ②開校50周年記念準備委員会を開催し、実行委員会を円滑に進められたか。 | ①新たに5年生の来作りを年間計画に組み込み、地域と民間企業の連携した地産地消を生かした体験学習が実現できた。また、各学年とも多くの社会人講師や学習支援ボランティアを要請し、事業を実施できた。 ②開校50周年記念準備委員会を立ち上げ、協議を重ねる中で、具体的な取組や予算確保、詳細の運営事項について確定できた。 | A | ①開校50周年記念準備委員会が決定した取組について実践していく。 ②ユネスコスクールの取組について併せて情報発信していく。 | | |
| 4 | (現状) ○Sola ルームの運用開始に伴い、備品や消耗品を整えた。 ○生成AIやスクリーンの活用研修を行うことで、校務の効率化を進めている。 ○校長マネジメント経費を基に、職員室環境のフリーアドレス化に向けた環境整備の準備を終えている。 ○次年度予算編成に向けて予算会議を行い、老朽化備品の更新のため、備品枠を引き上げ、教育環境の刷新と代替備品の更新に向けて予算編成を見直した。 (課題) ○老朽化備品と消耗品が依然として残っており、不要物品を整理し、新規教材や備品を調達する必要がある。 | 個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるための環境整備について | ①事務職員との予算会議を行い、校長マネジメント経費の適切な予算執行を行う。会計監査により、会計事故の防止を未然に防ぐ。(5月から) ②東トイレ改修に伴い、トイレの使用や清掃ルールの検討会議を行う。(2学期) ③職員室のフリーアドレス化による環境改善を行う。 ④寄付・寄贈については、手続きを迅速かつ確実にを行い、適正な執行を行う。(通年) | ①教職員学校評価「施設整備」(R6:90%→R7:92%) を達成したか。 ②東トイレ改修に伴う安全対策や業者との連絡調整が迅速に行えたか。 ③職員室のフリーアドレス化による環境改善を行ったか。 ④寄付・寄贈について申請を確実に行ったか。 | ①教職員学校評価「施設整備」97% (+7%) を達成した。 ②東トイレ改修に伴う安全対策や業者との連絡調整が迅速に行えた。 ③職員室のフリーアドレス化による環境改善を行い、打合せのスペースにも活用することができた。 ④寄付・寄贈について申請を確実に行った。 | A | ①事務職員との予算会議を行い、校長マネジメント経費の適切な予算執行を行う。会計監査により、会計事故の防止を未然に防ぐ。(5月から) ②東トイレ改修に伴い、トイレの使用や清掃ルートを徹底する。 ③職員室のフリーアドレス化による環境改善を行う。 ④寄付・寄贈については、手続きを迅速かつ確実にを行い、適正な執行を行う。(通年) | ・寄附・寄贈については、引き続き厳正に手続きをとってほしい。 | |
| | | 学校施設の安全管理について | ①特別教室の老朽化備品及び消耗品を調査し、予算会議をとおして不要物品の整理と新規購入を計画的に行う。(8月) ②毎月安全点検を確実に実施し、迅速な修繕を行う。 | ①不要物品の整理と教材の新規購入が計画的に行われたか。 ②安全点検に基づく迅速な修繕と教育環境改善で、児童が安全に過ごせたか。 | ①G・S ルームの痛んだ机を新規購入品に変え、教室環境を整えた。職員室の机についても新規購入デスクを順次導入した。 ②安全点検とトイレの不審物チェックを日々併せて行うようにして効率的に管理職が確認できるようにした。このことにより、安心安全な学校生活が送れた。 | A | ①破損の激しい机や机の撤去・交換を行う。 ②校庭・体育館の安全管理を重点的に行い、杭やくぎ、画鋲等によるけがの未然防止を行う。 | | |
| 5 | (現状) ○研修受講奨励と年間2回の管理職授業参観フィードバックを行い、各教員の授業スキルを高めている。 ○スクールダッシュボードやアプリの活用により、授業や学級事務を効率化している。また、スクリーンの配信で学校だよりや学年だより、各手紙の大半をペーパーレスにし、業務削減している。 ○仕事のストレス判定の結果、仕事の負担は平均をやや下回り、上司同僚の支援については、平均よりも3割低く、良好な職場環境を保つてきている。 (課題) ○特定の職員の業務の効率化と時間外在校時間の縮減に向けての意識改革が必要である。 ○キャリア段階Iの教員の指導力向上とベテラン教員の学校運営への推進力の向上を図っていく必要がある。 | 教職員のキャリア段階に応じた資質・能力の向上について | ①ICT 担当教員による研修を行い、教職員の ICT 活用能力を向上させ、校内教育 DX を進める。(通年) ②新たな学びの指標に基づく授業評価を行い、管理職による授業観察シートを活用し教職員の授業力を向上させる。(年間任意の時期に実施) ③当初面談時に教職員のキャリア段階に応じた研修受講奨励を進める。(5月) | ①ICT 担当教員によるコンピュータ研修を行い、校内教育 DX を進められたか。 ②新たな学びの指標に基づく授業評価を行い、管理職による授業観察シートを活用し教職員の授業力を向上させたか。 ③当初面談での教職員のキャリア段階に応じた研修受講奨励により、計画的に研修を受講できたか。 | ①ICT 担当教員によるコンピュータ研修を行い、iPad 導入に向けての校内教育 DX を進めた。 ②全教員に管理職授業参観を設定し、一人ずつ授業スキルについて指導助言を行った。新たな学びの指標に基づく授業評価を行い、管理職による授業観察シートを活用することで教員の授業力を高めた。 ③当初面談時に教職員のキャリア段階に応じた研修受講奨励により、計画的に研修を受講できた。 | A | ①担当教員による研修を行い、教職員の情報・ICT 活用能力を向上させ、校内教育 DX を進める。(通年) ②新たな学びの指標に基づく授業評価を行い、管理職による授業観察シートを活用し教職員の授業力を向上させる。(年間2回実施) ③当初面談時に教職員のキャリア段階に応じた研修受講奨励を進める。(5月) | ・子どもたちが学校の先生になりたいと思うような学校や先生方の働き方になることを願っている。 ・学校に対しての要望等で、対応に苦慮するモニターペアレントがいらないか危惧している。 | |
| | | 働き方改革や業務効率化についての取組について | ①業務改善委員会での意見聴取を積極的に進め、仕事の精選と校務の効率化を進めることで、時間外在校時間の縮減を進める。(5月) ②校長との面談をとおして、業務量について分析を行い、悩みに適切に助言し、仕事と家庭とのバランスの両立を図れるようにする。(各学期) | ①時間外在校時間の月平均 (R6:26 時間→R7:25 時間) を達成したか。 ②教職員ストレスチェック総合健康リスク (R6:66→R7:60) を達成したか。 | ①時間外在校時間の月平均 25 時間 50 分 (50 分超過) ②教職員ストレスチェック総合健康リスク 68 (目標 8 増) 各学年当たりの授業時数を減らし、モジュール授業を導入することで会議時間を確保した。在校時間の多い教員には、面談の中で打合せをし、効率的に業務する方法について考案した。 | A | ①生徒指導・教育相談・特別支援教育の各校務組織と連携して児童や保護者の対応を円滑に進めることで校務の効率化を進め、時間外在校時間の縮減を進める。(5月) ②校長との面談をとおして、業務量について分析を行い、悩みに適切に助言し、仕事と家庭とのバランスの両立を図れるようにする。(各学期) | | |

学びの質の向上に関する取組

子どもの発達や心身のサポートに関する取組

地域とともに関する取組

教育環境の整備に関する取組

教職員のキャリア形成に関する取組

